



第百二十七號 (第十一卷) 昭和六年十一月

“1932年”の年鑑より

“1932年”といふ年は、年初めから金星が毎夕の西空に美しく輝やいて天を飾り、殆んど六月の終りまで、上半期の間、宵の明星として、人の眼を惹きつける。そして、七月末からは又、暁の東天へ轉じて、年末まで、永く「あけの明星」として輝やくこととなる。一般の人々が、金星のあらゆる姿を眺め楽しむのに好いばかりでなく、専門家にとつても、金星の嚴密な觀測をするのに、此の年は實に天興の好機である。

1932年は、實に多數の週期彗星が歸來する年である。中でも、グリグ・スケレルプ彗星、ニウジミン彗星、テムベル・スキフト彗星、コブ彗星、ボレリ彗星、ブルツクス彗星、ファユ彗星、等は皆今までに幾回も出現したことのあるもので、軌道はよほど確かめられてゐるから、こんどの再來もほゞ確かに豫想されるが、尙ほ其のほか、第二ワルフ彗星、シヨア彗星、第一テムベル彗星なども、第二回目の出現を此の1932年に見せるらしく思はれる。勿論これ等のほかに、全然新しい彗星も、例年通り、發見されるだらう。此の年こそは、去る1925年の盛況にも増して、いかに賑やかな彗星オンパレードが天空に現はれることかと、人々を楽しませる。

彗星の親類筋の流星界に於いても、殊にかの十一月の獅子座流星群が、いよいよ此の1932年は今世紀になつて最初のスバラシイ姿を見せるだらうと豫期される。あの1899年の時のやうに『地球が破壊される』などといふ迷信を言ひふらす人は有るまいと思はれるが、しかし世間の大評判ものとなることは確かである。

此の1932年の八月から全世界の學者たちによつて、五十年ぶりに、國際極地觀測¹⁾が始められる。氣象や地磁氣、オーロラ等の研究と共に、此の機に太陽の活動の研究が天文方面では徹底的に行はれるに違ひない。可なり忙はしい年である。

1932年は米國で、博覽會だの、オリムピックだのと、種々の賑やかな行事が行はれるが、學術方面でも、國際天文同盟の第五回總會や、太平洋學術會議の第五回總會、其の他いろいろの國際大會議が開かれる筈である。其の結果如何は、將來の學術進展のために大なる意味を持つに違ひないと思はれる。